シャルル＝ルイ・フィリップ『ペルドリ爺さん』における「時間意識」について

東海　麻衣子

はじめに

ポール・リクールは、大著『時間と物語』において、以下のように述べている。

> Ce sera une thèse permanente de ce livre que la spéculation sur le temps est une rumination inconclusive à laquelle seule réplique l'activité narrative.[1)]

「結論の出ない反芻」である「時間に関する思弁」に対し、「物語活動」がいかに返答し得るか。リクールは、ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』、トーマス・マン『魔の山』、マルセル・プルースト『失われた時を求めて』を選出し、分析を行なっている。というのも、これらの作品は以下のような共通項をもつことによって、そのテーゼを立証する「物語活動」とみなされるからだ。

> Les œuvres que nous allons étudier sont de telles *fables sur le temps*, dans la mesure où c'est l'expérience même du temps qui y est l'enjeu des transformations structurales.[2)]

「構造的変換の中心問題が時間経験そのものである」という条件において「時間についてのはなし」とみなされる三つのフィクション物語。この前提に従うなら、シャルル＝ルイ・フィリップもまた、あらゆる角度から「時間についてのはなし」を物した作家だと言えるだろう。これまで指摘されたことはないが、彼もまた、フィクション物語のみに許された「時間経験の多様性」[3)] を提示してみせた作家の一人であったのだ。フィリップは生涯に残したほとんどの作品において、「時間に関する思弁」を繰り広げている。そして、実に様々な時間の性質を暴きだしているのである。[4)]

本論文では、その中から、『ペルドリ爺さん』を取り上げ、論じてみたい。そして、そこに提示される三つの「時間意識」を通して、集団と個人の「時間意識」という

ことについて考察をめぐらせたい。[5)]

では、『ペルドリ爺さん』のあらすじを追いながら、そこに見られる「時間意識」を見ていこう。

『ペルドリ爺さん』における三つの「時間意識」

第一部第一章は、主人公である鍛冶屋のペリドリ爺さんが、目を悪くし、仕事をやめるよう医者に宣告される場面から始まる。途方に暮れるペルドリ爺さんのそれまでの人生が描かれていく中で、彼の住む「小さな町」もまた描き出されていく。そして、物語の鍵となる「時間」のイメージが提示される。

> Perdues dans le temps, les heures pendaient au-dessus d'elle［= la petite ville］, de l'azur monotone, depuis le matin jusqu'au soir et tombaient goutte à goutte dans les maisons où les besognes des métiers et celles des ménages occupaient la vie et semblaient la vie même. (p. 244)

「時」の中に掻き消えていく「時間」が、「小さな町」の上にぶら下がっているというイメージ。「一滴ずつしたたり落ちる」と表現される液体のイメージ。こうしたイメージが物語全体を彩っていく。そして、この「小さな町」の様子が描かれる第一章では、そこに住む職人たちやブルジョワの生活ぶりが活写されていく。

第二章。ペルドリ爺さんの甥ジャン・ブーセの家では、エコール・サントラル に合格したジャンを祝って、家族が食卓についている。喜びにあふれた家族の食事。ここで二人目の主人公ジャン・ブーセの 「時」に対する姿勢が語られる。

> Jean Bousset sentait son bonheur s'accroître par la présence de quelqu'un qui le contemplait et, pensant à la veille où il n'était pas encore « élève à l'École Centrale », triomphait du temps et des hommes. (p. 254)

有名校への進学は、とりわけブルジョワではない職人の息子にとって、勝ち誇るべき成功であろう。しかしながら、勝ち誇るべき相手として、「人々」とともに「時」を並置しているところに、ジャンの「時」 に対する対抗心を見て取れるのではないだろうか。つまり、彼にとっての「時」とは、打ち勝つべき敵として想定されているのである。

そして、「小さな町中に、ペルドリ爺さんの不幸が長いこととどまっていた」 (p.

261) という一文で始まる第三章では、ペルドリ爺さんの悲しい生活が綴られる。仕事を奪われたペルドリ爺さんは、怠惰で無気力な生活を送るようになり、代わって婆さんが働くようになる。彼らは町の「救貧会」(p.263) に登録され、援助を受けながら、細々と暮らす。「それは、目的もなく、付け加えられていく日々とともに作られていく生活だった」 (p.271) と語られるペルドリ爺さんのみじめでつらい三年の月日。そして、無為に過ぎていく「時」が、次のように描かれる。

> Le temps coule comme dans les conques marines, monotone et bête, en souvenir de la mer et des galets et on l'entend dans sa tête comme une fuite sans cause. Le temps s'en va son train et ressemble aux chiens errants qui trottinent en baissant l'oreille (p. 271)

観念的な「時」と現実的な「時」。一方は、どこか遠く、「貝の中」で流れているような「時」。それは、「単調で愚かしく」、静かな「時」であり、その衣擦れのような気配が、かろうじて人々に意識されるような「時」である。そして、もう一方は、日々「淡々と進む」現実の「時」。「耳をたらしてとぼとぼ歩く野良犬」のように、よろよろと前に進んでいく「時」である。こうした、どこか遠くで流れていくもののようで、みじめな日々をのろのろと刻んでいくものでもある「時」。それが、年老いて仕事を奪われたペルドリ爺さんを取り巻く「時」のイメージである。

こうして、なんとか「時」を過ごしていくペルドリ爺さん。続く第四章では、そんな爺さんが久々に手にする喜びの場面が描かれる。遠方からやってくる息子や娘たち。ごちそうを囲む家族の陽気なひととき。あっという間に過ぎ去ってしまう「時間」は、次のように擬人化される。

> Et les heures venaient, se fixaient un instant, le coude sur la table, puis se rassasiaient et roulaient comme un sang chargé. Les heures vinrent jusqu'à sept heures ; mais quand ce fut la dernière, il y eut un frisson, car elle se dressait et vous menaçait de ses yeux. Ah ! l'alcool n'était rien ; le monde s'agitait et se chargeait d'une heure nerveuse. On n'osait faire un geste, de peur de la troubler ; il semblait qu'elle eût suivi le bout de vos doigts ! (p. 287)

フィリップの小説世界において、「時」と「時間」が擬人化されるのは、それが存在感をもち、人間を追い詰めるときである。息子や娘たちと、おいしい食事をし、酒

を飲み、幸せの絶頂にいるペルドリ爺さん。この「時間」ができるだけ長く続くようにと祈らずにはいられない。しかし、彼らの帰る「七時」は刻一刻と近づいてくる。

この「擬人化された本質体」« entité personnifiée »[6] である「時間」はまず、複数の「時間」« les heures » として「やってくる」。「テーブルに肘をついて」しばらく待っているが、「やがて飽き飽きして、鬱積した血のように転がり出す」。そして、「最後の一時間」« la dernière »、つまり六時から七時の一時間が「立ち上がり、その目で脅しつける」のだ。爺さんは皆を引き止めるが、「時間」は待ってくれない。そして、「七時」になる。皆は席を立つ。酔っ払った爺さんは、なんとか長女を引き止め、しばらく滞在させることに成功する。こうして、「七時」が「ほっとしたため息のように飛び去って」(p. 288) 、ようやく爺さんは、「時間」の脅迫から逃れるのである。

しかし、第五章では、長女を引きとめたことがあだとなり、ペルドリ爺さんと婆さんをさらなる不幸が襲う。「救貧会」から援助を受けて生活している爺さんと婆さんが、その娘まで養っていることがブルジョワたちの反感を買い、爺さんたちは「救貧会」の名簿から外されてしまうのである。

こうしたペルドリ爺さんを主人公とした顚末が、第一部において語られる。そして、第二部に入ると、爺さんの甥であるジャン・ブーセの物語が語られていく。

幼少時から優秀だったジャンは、バシュリエとなり、難関のエコール・サントラルに進学する。そして、学業を終えると技師として化学工場に勤め始める。彼は、馬車大工である父ピエール・ブーセの誇りであり、「小さな町」の英雄であった。しかしあるとき、工場でストライキが起き、労働者たちが直談判しているところに立会ったジャンは、工場長に悪態をつき、会社を飛び出してしまう。インテリで高給取の技師であったジャン・ブーセだが、労働者の息子として、黙っていられなかったのである。こうして無職となったジャンを、父や母は冷たく迎える。理解者はただ一人、ペルドリ爺さんだけだった。

第二部第二章では、「暇」をもてあますペルドリ爺さんが、日がな一日ベンチに座り、以下のように「時間」をつぶしている姿が映し出される。

> Il faisait des rainures, de larges rainures pareilles à de sillons ; ensuite il s'essayait à les combler et <u>cela formait des minutes, puis des quarts d'heure, puis des après-midi</u>. (p. 305)

ここに、職を失い、家にも居場所のなくなったジャン・ブーセが加わる。「日々がのろのろと進み、一人の男を盲目の国へと連れていく生活だった」(p.320) という第三章の書き出しが、ジャンの暗黒の日々を言い表す。そして、その暗い生活が、ブーセ家全体に重苦しく広がっていくのだ。無為徒食の日々を送る息子と、若い頃から苦労してきた父親。そこには、失業者であるジャンの潰すべき無為な「時間」と、職人である父親の守るべき貴重な「時間」との対立が見え隠れする。

> Ils déjeunaient vers midi un quart et parfois Jean s'était attardé sur le banc. On décida qu'on ne l'attendrait plus parce qu'il n'y avait rien de mieux que d'être à l'heure et que, rôder pour rôder, il devait comme les autres faire figure à la maison.
> (p.321)

「時間厳守ほどよいことはない」。そんな父親の姿勢は、ジャンの合格祝いの場面に、すでに描かれている。第一部第三章をしめくくる父親のセリフにさかのぼってみよう。

> « ［…］ Enfin, mon petit, tout ce que je te dis, c'est pour ton bien. Tout ça, tu le trouveras plus tard. Voilà qu'il est une heure et demie, il faut que j'aille travailler. »
> (p.260)

息子が合格したという日。家族で昼食を食べ、ワインを飲み、これまでのすべての苦労が報われたかのように喜ぶ父親。高揚した気分で息子に説教をし、上機嫌の父親だが、「一時半」になると、さっさと席を立ち、いつものように仕事場へと向かう。辛酸をなめてきた父親の「時間意識」は厳格だ。そして、それは「小さな町」に住む職人全般の「時間意識」なのである。そのことは、冒頭にある「小さな町」の住民たちの描写の中にも見て取れる。

> Les ouvriers aisés vivaient dans des maisons propres, avec des idées carrées dans tous les coins de la chambre et qui luisaient sur les meubles, s'asseyaient sur la table et bouillaient avec l'eau de la marmite pour la soupe du matin et du soir. Fixés dans leur attitude de travail, ils tournaient avec les aiguilles de l'horloge tout autour d'un centre vital d'ordre et d'économie. Une sagesse délimitée au cordeau bordait leur vie. On

appelle cela : avoir envie de bien faire. (p.245)

ゆとりのある職人たちは、「仕事への姿勢に規定され、柱時計の針とともに、秩序だったつつましい生活の周りを回っている」。そんな職人の一人である父親にとって、「柱時計の針とともに」正確に刻まれる「時間」を軽視する息子とは、「秩序」を破る異端者にほかならない。こうして、父親と息子の対立が深まる中、沈黙する一家を取り巻くのは、以下のような「時間」である。

Les heures se perdaient dans la chambre, grelottaient dans l'horloge et n'entraînaient plus ces coulées de pensée commune comme il en est dans la famille. (p.324)

それぞれ別々の「時間意識」をもった家族に対し、家の中にたゆたう「時間」はもはや、「共通の思考の流れ」をもたらしてはくれない。一人一人の家族は、別々の「思考の流れ」をもって、別々に行動することになるのだ。そして、そのばらばらな「時間意識」がとうとう衝突する。いつものように嫌味を言う父親に、ジャンは我慢しきれなくなり、二人は殴り合う。暴言を吐き、皿を投げつける息子と、それを受けて立つ父親。その周りで、おろおろするばかりの母親と妹。こうして、異なる「時間意識」を家族内にもちこんだジャンは、家を飛び出すことになるのである。そして、家出をしたジャンは、あてもなく歩き続ける。そこに現われる次の文章を見てみよう。

Il était une heure et demie, comme toujours il avait sa montre. (p.326)

ここに、異端者ジャンの「時間意識」が表象されている。つまり、ジャンの「時間」を刻むものは、「小さな町」の「柱時計」« l'horloge » ではなく、自分一人の「懐中時計」« la montre » なのだ。このことは、「柱時計」が刻む「時間意識」を共有する「小さな町」の中で、彼一人だけが、自分だけの「時間意識」をもっていることを示している。

こうして、ジャンは、「小さな町」を出、夜になっても、闇の中を歩き続けるのだが、二度ほど擦れ違った馬車が、彼に「小さな町」を思い起こさせる。

Deux fois il croisa des voitures avec des lanternes et la lumière rayonnait comme

le cœur des maisons où vont s'arrêter les voitures. On s'emmitoufle de grosse étoffe, le bonheur est dans la paix, il y a des horloges qui comptent une vie de province où tout est fixé. (p.327)

「小さな町」では毎日、各家の「時計」が、変化のない一律の「時間」を刻んでいる。そして、その「時間」を共有できない者は、その空間をも共有できないことになるのだ。

家を出たものの行くあてもないジャンは、孤独に耐えかね、もと来た道を引き返す。そして、たった一人の理解者であるペルドリ爺さんの家へと向かうのである。

第四章。こうして、ペルドリ爺さんの家で暮らし始めたジャンは、家の前のベンチで、再び爺さんと語らうだけの毎日を送る。そのうちに、働きづめに働いてきたペルドリ爺さんの妻が、あっけなく死んでしまう。

そして第五章。パリに職を見つけたジャンは、自分と一緒にパリに行こうと爺さんを誘う。爺さんはためらうが、しかし、目も足も悪い老人が一人ぼっちで生活をしていくあてもなく、生涯を過ごした「小さな町」を後にすることを決意する。こうして、ペルドリ爺さんとジャンは、パリで共同生活を始めるのである。だが、安普請の下宿に「木靴」の音を響かせるペルドリ爺さんが、パリになじむことができないのは分かりきったことだ。

On le connut bien vite dans la maison à cause de ses gros sabots qui battaient l'escalier, qui réveillaient les murs et illustraient chacun de ses pas d'un bruit guerrier comme si sa vie canonnait les heures. (p.346)

「人生が時間を砲撃しているかのように」という表現が、「時間」と戦い、打ち勝とうとあがいているペルドリ爺さんの姿を浮かび上がらせる。そして、そんな爺さんを象徴するのが、爺さんの「木靴」なのである。「木靴」のもちこむ「いなかっぽさ」が、爺さんと「小さな町」とを固く結びつけ、爺さんがパリに溶け込むことを阻む。まるで、ピエール・ブルデューの言う « distinction » をそのまま体現するかのように。

Il suffit d'avoir à l'esprit que les biens se convertissent en signes distinctifs, qui peuvent être des signes de distinction, mais aussi de vulgarité, dès qu'ils sont perçus relationnellement, pour voir que la *représentation* que les individus et les groupes

livrent *inévitablement* à travers leurs pratiques et leurs propriétés fait partie intégrante de leur réalité sociale.[7)]

「個人や集団がその慣習行動や諸特性を通して避けがたく露呈する表象」。それが、ジャンにとっての「懐中時計」であり、ペルドリ爺さんにとっての「木靴」となる。つまり、「卓越性=上品さ」« distinction » を表明するジャンに対し、「木靴」という表象によって「通俗性=下品さ」« vulgarité » を「避けがたく」露呈してしまうペルドリ爺さんは、ジャンとは逆のベクトルによって、周囲と齟齬をきたすことになるのである。

物価も高ければ、顔見知りの者もいないパリで、爺さんは「小さな町」を出てきてしまったことを後悔する。そして、ジャンのわずかな給料をぎりぎりまで切りつめて生活しながら、徐々に神経をすり減らしていく。そんなとき、金に無頓着なジャンは、爺さんに正月のプレゼントを買ってくる。それは、二十フランもする「革靴」 « une paire de souliers lacés » だった。爺さんは途方に暮れる。なぜなら、爺さんの足には「木靴」しかはまらないからだ。

「木靴」の象徴する「小さな町」と、「革靴」の象徴するパリ。爺さんは「革靴」を、つまりパリを履きこなすことができない。そして、この「革靴」のために無駄になった二十フランが、毎月の赤字となって、爺さんを追い詰めていくのだ。爺さんは、優しいジャンに何もしてあげることができず、ただパンと石油を消費するだけの自分を悲しく思う。そして、いよいよ、六十八年の人生に終止符を打つことを決意するのである。

Il sortit un soir des premiers jours de février, peut-être <u>dix minutes avant six-heures</u>. <u>Jusqu'au dernier moment il avait voulu rester dans la chambre afin de boire jusqu'au bout sa dernière goutte</u>. (p.354)

最後の最後まで、爺さんにつきまとう「時間」。爺さんは、二月の寒空の下、「おそらく六時十分前」に家を出るのだ。そして、「最後のときまで、部屋にとどまっていたいと思った。最後の一滴を飲み干すために」。この « sa dernière goutte »（「最後の一滴」）という語は、読者に « Boire le calice jusqu'à la lie »（「杯を残りかすまで飲み干す」すなわち「最後の最後まで苦汁をなめ尽くす」）という表現を思い起こさせる。つまり、« sa dernière goutte <u>de la vie</u> »（「生命」の「最後の一滴」）という意味で用いられたものであると考えられるのだ。だが、液体のイメージで語られる「時間」の

描写を見てきた我々は、それをあえて、« sa dernière goutte du moment »（「時間」の「最後の一滴」）と解釈してみたくなる。「一滴ずつしたたり落ちる」という描写で語られはじめた「時間」は、物語の終わりに、「最後の一滴」となって、ペルドリ爺さんに飲み干される。こうして、『ペルドリ爺さん』は幕を閉じるのである。

おわりに

以上、物語を牽引し、登場人物の運命を左右するものとして、三つの「時間意識」を指摘してきた。

「柱時計」« l'horloge » に刻まれる「時間」が支配する「小さな町」の「時間意識」と、それぞれの立場から、それぞれ別の経路を辿って異端者となってしまう二人の主人公の「時間意識」。同一の空間に身を置きながら、別々の「時間意識」をもつ個人は、結局、集団の「時間意識」に駆逐されてしまう。その姿に、我々は、集団に共有される「時間意識」が人間の居場所を規定し、時に生死をも決定づけるほどの支配力をもつという「時間」のもつ恐ろしい側面を見ることができるだろう。

「時間」とは何か。そのアポリアを解決することはできない。しかしながら、『ペルドリ爺さん』は、こうした「時間に関する思弁」に真っ向から立ち向かい、その悪魔的性質を見事に捉えることで、この「結論の出ない反芻」を生産的なものにしている。つまり、この物語は、さまざまな条件によって変質する「時間意識」が、共同体に接し、いかに個人の運命を決定するに至るかということを問う一つの試みであり、「時間」を個人対集団という観点から捉え直した「時間についてのはなし」であると考えられるのである。

注

Charles-Louis PHILIPPE, *Le Père Perdrix* dans *Œuvres complètes tome Ⅱ*, édition présentée et établie par David Roe, Ipomée, 1986.　からの引用は直接本文中にページ数を記す。なお、邦訳および引用中の下線は筆者による。

1）Paul RICŒUR, *Temps et récit Tome I*, Seuil, 1983, p.21.（なお、本文中の邦訳は、『時間と物語』Ⅰ～Ⅲ, 久米博訳, 新曜社, 1987-1990. を参考にさせていただいた）

2）Paul RICŒUR, *Temps et récit Tome II*, Seuil, 1984, p.151. 当該引用文は、以下の文章を受けたものである。« D'abord, ces trois œuvres illustrent la distinction proposée par A.A. Mendilow entre « *tales of time* » et *« tales about time* ». S'il est trop demandé que l'on raconte une fable *du* temps, déclare Thomas Mann dans le *Vorsatz* de la *Montagne magique*, il n'est pas moins vrai que le souhait de raconter une fable *sur* le temps n'est pas tellement absurde... (Nous) confessons volontiers que nous avons eu quelque chose de cette nature en vue dans le présent ouvrage ».

3）« Ce sont des variétés de l'expérience temporelle que seule la fiction peut explorer et qui sont offerts à la lecture en vue de refigurer la temporalité ordinaire. » (*Ibid*.)

4）これについては、2009 年 5 月に広島大学（文学研究科）に提出し、9 月 30 日に「博士（文学）」の学位を授与された学位請求論文『シャルル＝ルイ・フィリップにおける「時」・「時間」・「時間意識」の考察』にまとめた。

5）日本語では、抽象的ないし哲学的な意味を加味する場合、「時」よりも「時間」という語を用いることが一般的なことから、フランス語の « le temps » を「時間」と訳すことが多い。（例えば、引用した Paul RICŒUR, *Temps et récit* の邦題は『時間と物語』であり、Georges POULET, *Etudes sur le temps humain* は『人間的時間の研究』と訳される）しかしながら、フィリップの作品では、« le temps » と « l'heure » を、日本語で一般的に用いる意味での「時」と「時間」として単純かつ明確に区別しているため、本論文では、« le temps » を「時」（「時間」をも含めた「月日の移り行き」）、« l'heure » を「時間」（「一日より短い場合」）として訳した。そして、本文中に用いる「時間意識」という語は、その「時」と「時間」に対する意識と捉える。

6）*Ibid*., p.210.

7）Pierre BOURDIEU, *La Distinction*, Minuit, 1979, pp.563-564.（なお、本文中の邦訳は、ピエール・ブルデュー, 『ディスタンクシオンⅡ』, 石井洋二郎訳, 藤原書店, 1993. を参考にさせていただいた）

Du Temps dans *Le Père Perdrix* de Charles-Louis Philippe

Maiko TOKAI

Si l'on porte notre attention sur le sujet du Temps dans *Le Père Perdrix* de Charles-Louis Philippe, on peut relever trois sortes de Temps dans le récit.

Il y a d'abord le Temps de « la petite villle » qui entoure les personnages. C'est un dominateur rigoureux, symbolisé par « l'horloge » qui se trouve dans chaque maison. Il exige des habitants « l'ordre » et « des principes » accompagnés de « travail » comme leur raison d'être.

Notons aussi, le Temps de Jean Bousset, l'un des personnages principaux, neveu du Père Perdrix. Sans emploi et vivant chez ses parents, il néglige le Temps strict de son père, ouvrier, et finit par être chassé de la famille, puis de « la petite ville ». Il a en effet introduit le Temps étrange, symbolisé par « la montre » qui marque le Temps de l'individu en opposition avec « l'horloge » de la communauté.

Enfin, on peut indiquer le Temps du Père Perdrix. Condamné à renoncer à son travail de forgeron suite à une maladie des yeux, il perd son identité sociale liée à son statut de travailleur. Menant une vie oisive, il devient l'hérétique qui trouble le Temps de « la petite ville » et se voit ainsi exclu d'abord du « bureau de bienfaisance » et pour finir de « la petite ville » même. Mais il est impossible à un vieil homme qui a vécu toute sa vie dans une petite ville de recommencer une nouvelle existence à Paris. Il ne retrouve sa place nulle part et choisit de se supprimer.

Ainsi, se dégagent deux Temps individuels exclus de la norme que représente le Temps de la communauté. Il nous paraît alors possible d'y lire cette terrifiante présence du Temps qui marque le cadre de l'existence des hommes, fixant à chacun leur place de vie ou à défaut celle de leur mort.